

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 第13回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

はじめに 10月28(土)、29日(日)に札幌学院大学(北海道江別市)で開催された第13回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト2017」に学生支援スタッフが参加しました。本学は「支援の準備から軌道に乗せるまでの半年の取り組み」というタイトルで発表し、新人賞を受賞しました。なお、当コンテストでは19の大学・機関が参加しました。

長所を生かした支援活動 ポスター作成に当たり、本学の取組みの特徴を「障がい学生自身の関わり」、「学生の意見が反映しやすい環境」、「フラットな関係」、「やってみる姿勢」にまとめ、聴覚障害学生が入学するまでの準備期間と、入学後の支援開始期間に分けて、それぞれの取り組みを報告しました。

初めての聴覚障がい学生支援のため、試行錯誤をしながらでしたが、振り返ってみると初動の支援体制を構築することができた要因として①入学前から早めに取り組んだこと②聴覚障がい学生が積極的に協力したこと③ダイバーシティ推進体制を基盤として各部署が連携できた

ことが挙げられます。一方、課題として、授業担当者との意見交換や各キャンパスとの連携の必要性も見えてきました。

来場者からは支援スタッフの募集方法、ダイバーシティ推進室に学生が集まるための工夫に関心が寄せられました。

より良い支援体制を目指して シンポジウムに参加した学生から、他大学の事例を参考に、スキルアップ研修会の企画やより効果的な広報の必要性が提案されるようになり、支援活動がより活性化するようになりました。また、シンポジウム参加に当たり、障がい学生と支援スタッフが寝食を共にする中で、多くの気づきがあった、という感想がありました。授業外での関わりからさらに理解が深まるものです。

本学が組織的な支援活動を開始して3年が経過し、障がい学生の在籍数・種別ともに増加しつつあります。それぞれのニーズに応えられるよう、一層の取り組みが求められるでしょう。今回の受賞を一つの通過点として、より良い支援体制を構築していく所存です。



TOKYO みみカレッジ

11月19日(日)、南大沢キャンパスにて「TOKYO みみカレッジ」(東京都主催、NEC、本学共催)が開催されました。当イベントは今年度で3回目の聴覚障がいをテーマにした総合的なイベントです。大学の手話サークルによる舞台発表、講演会、遠隔手話通訳サービス体験、関係団体の展示紹介などが行われました。

ボランティアをテーマにした講演会では、本学の学生支援スタッフが、聴覚障がい学生支援に関わったきっかけから、そのやりがいや課題にも言及しながら報告し、「誰もが暮らしやすい社会にしたい」と抱負を話しました。今後ともダイバーシティ推進の視点を取り入れ、聴覚障がいに関する理解啓発に取り組んでいきます。



首都大学東京一時保育施設「首都大 KIDS」

新しいお友達も多くなり、ますます賑やかで楽しい保育室になってきました！お天気の良い日はみんなで公園へ。遊んでいるみんなのニコニコ笑顔がとってもステキです。11月の行事では大学にもお散歩に行きました。プレゼントも渡すことができ、サプライズ大成功でした！



ご利用には事前登録が必要です。詳細はWEBサイトをご覧ください。
首都大学東京ダイバーシティ推進室 首都大 KIDS のページ
<http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/index.html>



編集後記

今号掲載のセクシュアル・マイノリティ講演会とバリアフリー講習会では「当事者の貴重なお話を聞くことができ良かった」という感想を多くいただきました。

日時が合わなくて来場できなかったという方は、講演の様子を録画してありますので、ダイバーシティ推進室までお問い合わせください。

首都大学東京 ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 図書館本館1階
電話：042-677-1337 (直通) / 内線 2571 FAX：042-677-1355
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行日：2017年12月28日

編集・発行

No.19 December 2017 Newsletter ダイバーシティ通信



セクシュアル・マイノリティ講演会 2017

あなたが「アライ」であるために



みなさんは、「アライ(Ally)」という言葉を知っていますか。セクシュアル・マイノリティを理解し、当事者を支えようとする人々のことを意味する言葉で、近年になって広く用いられるようになってきました。11月28日(火)に行われた今年度のセクシュアル・マイノリティ講演会は、「あなたが『アライ』であるために」と題し、アライとはどういうことなのか、セクシュアル・マイノリティの当事者が安心して過ごせる環境を作るために、私たちはアライとしてどのようなことができるのかを学び、考えることを目指しました。



講師として、NPO 法人東京レインボープライド*より杉山文野さんと羽山響子さんをお招きしました。

講演会は、講演とグループトークの二部で行われました。まず、講師の杉山さんが自らのライフ・ヒストリーをたどる形で、セクシュアル・マイノリティ当事者として体験してきたことやその中で感じたことなどをお話し、それに続いてセクシュアル・マイノリティの基礎的な知識と、近年の国内外の動向を示されました。

そして、今回のメインテーマであるアライについて、アライであることに資格はなく、誰もがアライになることができることや、「身近にいる人が困っていたら、何かしたい」という気持ちが出発点になるもので、特別なことや難しいものではないということなどが説明されました。アライとして今すぐできることの一つとして、杉山さんは「ウェルカムングアウト」という言葉を示し、例えばこの講演会の感想など、セクシュアル・マイノリティに関する話題を周囲の人と話すことで、セクシュアル・マイノリティについて理解しようとしている人がいること、ウェルカムな雰囲気があることを明示することができることを指摘しました。また、羽山さんからは、自身が就職活動中に自分のセクシュアリティを企業にどう伝えるかを迷った時に、周囲のアライの人たちが自分の不安を受け止めたうえで応援してくれたこ

とで、無事に解決に結びついたとお話があり、アライがいることが当事者の支えになっている事例が示されました。

講演を受けて行われたグループトークでは、教員、職員、学生が一緒にグループになり、講演の感想をシェアすることにも、自分たちがアライになるために必要なこと、またアライとしてできることについて話し合いました。このグループトークの時間には、杉山さん、羽山さんが各グループを回り、直接参加者からの質問や疑問に答える場面もありました。その後、「アライとして誰に対しても誠実に接する」や「日常の会話の中に(セクシュアル・マイノリティを)話題として取り入れる」など、グループトークで出された意見を付せん書き出してホワイトボードに貼り、全体で共有しました。最後に、杉山さんから、アライであるということは、人として、目の前にいる人と向き合うことであり、アライといえどもセクシュアル・マイノリティの全てをすぐに理解することは難しく、失敗することは当然あって、失敗したときに素直に謝ることができるかどうかが大それたものメッセージが送られ、閉会となりました。

参加者からは、「当事者の声を聞くことができ良かった」「アライは特別なことではなく、当たり前のことなのだなと思った」「LGBTはどこか遠い存在だと思っていたが、身近にいてほしいことを強く感じた」など、講師の講演が強いメッセージとなって心に残ったことがうかがえる感想が多数寄せられました。また、「定期的に、地道にやっていただきたい」など、継続的な開催を求める声も複数寄せられ、関心の高さを改めて感じることができました。

*NPO 法人東京レインボープライドは、毎年5月に「東京レインボープライド」を開催し、パレードを行うなど、セクシュアル・マイノリティをはじめ、すべての人が、より自分らしく誇りをもって、前向きに楽しく生きていくことができる社会の実現を目指して、様々な取り組みを行っています。



ノートテイク講習会 (手書き要約筆記)



11月15日(水)に、日野キャンパスで初めてノートテイク(手書き要約筆記)講習会を開催し、講師に東京都立中央ろう学校の牛嶋文教諭をお招きしました。

今年度より聴覚障がい学生支援に取り組んでおりますが、主に南大沢キャンパスを中心としたものであり、各キャンパス間の連携が今後の課題として挙げられています。こうした状況を踏まえ、本講習会を開催することとなりました。

講習会では、大学生活で使う手話の紹介や、聴覚障がいとノートテイクの基礎について確認した後、ノートテイクの実習を行いました。全員初体験だったため、多少の戸惑いはありましたが、基礎的な技術を習得しある程度のノートテイクができるようになりました。

終了後には、パソコンノートテイク講習会の開催希望や、授業の支援見学・体験の希望が出るなど、日野キャンパスでも聴覚障がい学生支援が広がりそうだと感じました。支援活動を各キャンパスへ広げ、連携を推進していきたいと思っております。

牛嶋教諭には昨年度から複数回に渡り講師を引き受けていただき、感謝しております。ありがとうございました。



手話講習会(中級)



後期の手話講習会(16名受講)は前期の初級クラスを引き継ぐ形で、中級クラスを開講しました。講習内容は、初級に比べてより実用的なものとなり、会話表現を中心に行いました。また、実技のみならず座学も取り入れ、聴覚障がい者(ろう者)がどのような場面で困難を感じ、手話を必要としているかについても学びました。

前期から継続して学んでいる受講生が多い中、後期からの受講生もいましたが、驚くほど早く手話の基礎をマスターし、皆と打ち解け手話で雑談をする様子も見受けられました。

講習会の最終回は恒例となっているゲストの聴覚障がい者との懇談会を開催し、前期より突っ込んだ会話のキャッチボールが繰り広げられていました。

以下、受講生の感想を紹介します。「いつも非常に楽しく明るい空間でした。手話はもちろん、コミュニケーションは素敵なものなのだ、と再認識しました」、「今後も手話を使って人のためになることをしていきたいです。そのために勉強も続けます。勇気を出してダイバーシティ推進室訪ねて良かったなと思いました。ありがとうございました。」

10月の手話検定試験には本学から約10名が挑戦しました。皆さんに吉報が届くことを願っております。



平成29年度第2回バリアフリー講習会 「車いす学生の支援のあり方と共生社会を考える」



はじめに 12月6日(水)に第2回バリアフリー講習会を開催しました。講師に海老原宏美氏(NPO法人 自立生活センター・東大和理事長)をお招きしました。海老原氏は脊髄性筋萎縮症という進行性の障がいのため、電動車いすと人工呼吸器を使用して生活し、障がい者の権利擁護や相談支援に取り組んでおられます。

支援の主体性を持つ 海老原氏は、小学校から地域の学校で学びましたが、「できないこと」を前提に話が進むことが多く、「どうしたら参加できるか」という視点で考える機会が少なかったといいます。しかし、高校生の頃「障害者甲子園」に参加し、様々な障がい者の生き方を知り、支援についての価値観が変化しました。自身の支援に対して主体的に関わるようになり、それまで先生が行っていた自身の介助を友人に依頼するようになりました。

大学時代は、支援制度はありませんでしたが、学内外でボランティアを30~50名集め自立生活を開始します。しかし、アメリカ留学時に支援について「あなたはどうしたいのか」と問われ、自身のことにも関わらず答えられないことがあったそうです。幼少期から障がい者本人の意向を確認する経験の重要性を痛感したといいます。

自分の人生を生きられるように 思い返せば、小学校から大学までその学校では前例のない障がい学生だったため、自身が健常者にあわせることで受け入れられてきたといいます。しかし、今後は障がい者が過しやすい生き方で、共に生きられる社会の実現が求められます。そのためにも、分離教育、入所施設等、「良かれ」と思っている差別や分離を問い直

し、社会のなかにあるバリアを減らしていく必要があります。また、障害者差別解消法や支援制度の充実も必要になるといいます。

大学においても支援体制を整えることで、障がい学生が対等に学ぶことができるようにするとともに、その後の人生の可能性を高められるようにすることが望まれる、とまとめました。

感想、まとめ 以下、来場者の感想を紹介します。「自分の世界がひとつ広がったように感じた。良かれと思っただけの差別がすごく心に残った」、「『社会的バリアが障がい者をつくっている』に共感しました。社会が知らないことも原因と思うので、障がいをもつ側からアプローチしていきたい」、「本学も共生社会の実現を進めることが必要で、本日のような障がい者の『声』を聴く機会は貴重だと思います」等の感想が寄せられました。

支援制度が整備されていない時代に、個人の働きかけによって道を切り開いてきた方のお話は大変考えさせられました。また、支援体制を整備することにより障がいのある学生が対等に学べるというお話と、インフォーマルな支援関係の重要性についてのご指摘は示唆に富むものでした。制度の充実とともに、エンパワメントの視点を持ちながら取り組んでいきます。



防災訓練(日野キャンパス)

11月9日(木)に日野キャンパスにて避難訓練を行いました。避難訓練は毎年行っていますが、今年度は、障がいのある学生の災害時の課題を確認するため、車いす利用者役と、聴覚障がい者役の学生と支援者役の支援スタッフを配置しました。

聴覚障がい役を経験した学生は「情報が分からず不安になったが、ノートテイクのサポートがあって落ち着くことができた。周囲の学生が手話やノートテイクを使えるような環境だと聴覚障がい学生が安心できるのではないかと振り返りました。また、車いす利用者役の支援を行った学生からは「長い階段を一人で背負って移動するのは大変なため、非常時こそ多くの人が協力する必要があると思った」といった感想が聞かれました。

災害の際は、想定していない事態に遭遇し、サポートが必要な人のことは忘れられがちになるといわれます。日頃から情報伝達方法や避難方法、その後の情報共有などを確認し、あらゆる構成員の安全を確保する必要性を実感しました。



通称名使用が可能になりました!!

首都大学東京では、2017年10月1日に「首都大学東京における学生の通称名使用の取扱いに関する要綱」を施行しました。これにより、首都大学東京に在学する学生の通称名※使用が可能となりました。通称名を使用できる場合や、通称名が記載される文書、申請の方法などについては、ダイバーシティ推進室のWebサイトで要綱をご確認ください。また、ご不明な点につきましては、ダイバーシティ推進室へお問い合わせください。申請様式は、教務課・各学務課及びダイバーシティ推進室にご送付ください。

要綱(本文のみ)
http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/topics/img/alias_guideline2017.pdf

通称名が使用できる場合

1. 婚姻等により改姓した場合
2. 外国籍の学生が住民票に記載された通称の使用を希望する場合
3. 性別に違和感があり、自分の望む通称名の使用を希望する場合
4. その他の場合はご相談ください

※本制度における「通称名」とは、戸籍上の氏名(本名)に代えて、広く通用しているものをいいます。(旧姓を含む)

言葉の地図

視覚に障がいのある人が学内各所へアクセスしやすくするために「言葉の地図」を作成しました。「言葉の地図」とは、複数の短文テキストで目的地までの行き方を表記するもので、距離や方向、点字ブロックの有無等、空間把握を助ける周辺情報を盛り込みます。視覚に障がいのある人は「言葉の地図」をスクリーンリーダー(音声読み上げソフト)で確認しながら移動します。

実際の作成作業では、他機関や他大学の事例を参考にし、視覚障がい学生と支援スタッフが現地確認と原稿作成・修正を繰り返し、完成させました。

首都大学東京
キャンパスマップ ▶ https://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/map.html
交通アクセス ▶ https://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/access.html

「言葉の地図」作成のため注意して学内を歩いてみると、普段気にしていなかった音が空間把握の参考になることや、点字ブロックの敷設が不十分であることにも気付くものでした。あらゆる人が各所にアクセスできるように、情報環境の整備に取り組みます。



「より多くの人に
知ってもらいたい活動」

私が支援スタッフの活動を知ったのは、大学院への推薦が決まった後の、学部4年次の年末です。障がいがある学生が指導教授の来期の授業の履修を希望して、その補助をしてほしいと頼まれました。学部4年間をこの大学で過ごしましたが、私は支援スタッフの制度を知りませんでした。補助の話をつけに支援スタッフに登録し、最初に参加した活動はノートテイク講習会です。引き受けてみたものの、支障について具体的な何をするのだろう、と答えず何かが違うと考えるの参加でした。その時に聴覚障がいがある学生の話を通じて、自分でもできそうなことがあると知り、自分でも支援して行く中で、難しいこともありました。今では支援を通して価値観も広がり、登録して良かったと感じています。一方で、もっと早く活動を知っていたら、学部の4年間でずっと学べることにあったのではないかと、学部一年生で支援に参加している学生を見ると、もっと早く感じていました。



障がい者支援スタッフの募集やレクチャー会のお知らせを大学内でよく見かけました。スタッフの数も増え、情報発信も以前より積極的だと聞いています。興味をもって入る人たちがもっと早く知っていたら、と不安なように、様々なところからスタッフの声が広がっていくことを願っています。

障がい者支援スタッフ
理工学研究科数理情報科学専攻
修士一年 田中基之